

中村哲講演会報告集



アフガニスタンの少年たち

2007 年 10 月 26 日 仙台市シルバーセンター

目 次

・はじめに

・ごあいさつ

・講演要旨…………… 1～ 10ページ

・質疑応答……………11～ 15ページ

・感想…………… 16～ 29ページ
(講演会後にお寄せいただいた感想やお手紙など)

・あとがき

は じ め に

それはまるでミラーボールのようでした。

中村哲さんという大きな球体の周りにたくさんの鏡がついている。

百人いたら百枚の。千人いたら千枚の。

その鏡にひとりひとりの光が照射され、深く輝きはじめる。そんな講演会でした。

皆様から数多くのメッセージをいただきました。

ほとんどの方に共通していたのは「苦しんでいるアフガンの人々のために、わたしは何ができるのだろうか？」という自らへの問いかけでした。「考えてくれるだけでいい」と答えられた中村さんのことばに、どれだけ多くの方がほっとして救われ、またその寛容なお気持ちにこころを打たれたかは感想文集を読んでいただければわかると思います。

いろいろな切り口がありました。平和について、農について、水について、マスコミの報道について、温暖化について、日本の若者について。国と国の関係のあり方はそのまま人と人の関係のあり方につながるところがあり、例えば「暴力を使わない方が勇気がいる。そのほうがかえて強い自衛なんだ」ということばから、お友達との関係を考えた小学生もいました。

そして、そうしたすべてのことに対する考え方の根底にあるのは、中村さんがよく言われる「人間としての良心」でした。人が人を思いやり、人が人の死を悼み、人が人の幸せのために祈る。ひとつの国がほかの国を思いやり、ひとつの国がほかの国の人々の死を悼み、ひとつの国がほかの国の幸せのために援助する。そうした未来図を実現可能なものとして鮮明に見せてくださいました。

多くの方々から寄せられた思いは、まるで旱魃の大地につぎつぎと引かれていく水路のように、緑の小麦の芽を育むものでした。

もっとたくさんの水路をつくり、

もっとたくさんの芽を育みたくて、

わたしたちは記録集をつくりました。

この小冊子を、あなたの大切な方にも手渡していただければ幸いです。

ひとりで、ひとつの島であるひとはいない。だれもが、大陸のひとかけ。全体の部分をなす。

土くれひとつでも海に流されたなら、ヨーロッパは、それだけちいさくなる。

岬が流されたり、自分の友達が流されたと同じように。

わたしも人類の一部であれば、だれが死んでも、わが身がそがれたのと同じ。

だから、吊いの鐘は、誰のために鳴っているかと、たずねに行かせることはない。

鐘はあなたのために鳴っているのだ。

ジョン・デン 「危機に際しての祈り」より

ご あ い さ つ

「ペシャワール会をみやぎから応援する会」

橋 本 康 範

この講演会は、不思議な「縁」に導かれて開かれたものでありました。

2007年5月、フジコ・ヘミングさんのピアノリサイタルチャリティーコンサートが仙台市で開催されました。そのコンサートを企画した「にやむにやむ企画」代表、沓澤小波さんの橋渡しで、フジコ・ヘミングさんより百万円をペシャワール会へ、二十万円を「ペシャワール会をみやぎから応援する会」へご寄付いただきました。このご厚意にお応えするという意味あいもこめて仙台の講演が実現いたしました。また、沓澤さんご自身もアフガニスタンの人々を救う、命をつなげる寄金になったことが非常に嬉しいとおっしゃっていました。

「ペシャワール会をみやぎから応援する会」発足自体も、宮城にてアフガンの現地報告を行った私の話を聞きに来てくれた方が集まってできたもので、もともと強いつながりがあったわけではありません。全く知らない者同士のスタートでした。

私自身宮城に戻って来て、現地の話をしたと思うようになったのには、ひとつのきっかけがありました。それは現地にいて活動していた2003年の冬にアフガニスタンに一通の手紙が届いたことにあります。その内容は私が以前小学校の講師をしていたときに教えた子供が六年生になって、私がアフガニスタンにわたって活動していることをきっかけに、アフガンのこと平和のことを身近に考えるようになり、それを作文に書き、町の代表として発表したというものでした。その時、私は学校を離れて三年たっていました。

「ペシャワール会をみやぎから応援する会」は、『中村医師に賛同し宮城から一隅を照らす』をモットーに発足いたしました。今回のこの講演会はひとりひとりの縁と、思いがつながって実現することができました。それはまさしくこのモットーが現実のものとなっていくことを実感しております。

講演会に参加された多くの皆さん、そしてこの報告集をご覧くださった皆さん、ここからまたゆっくりですが、ひとりひとりの思いがつながり、まぶしくはなくとも消えることのない光が広がっていけばと思っております。

そして一日も早くアフガンの人々が、世界の人々が安心して暮らせる日々がくることを祈ってやみません。

講演要旨

皆さんこんにちは、中村哲です。

10日ほど前に日本に一時戻って来ました。

数日後にまた戻りますが日本に来て、今テロ特措法をめぐるいろいろな議論がされておりますが、ほとんど正確なアフガニスタンの情報がないということに驚いております。

今日は、聞き飽きた方もおられるかもしれませんが、私達の現地の活動について、私達が現地で見たこと、聞いたこと、実際にやってきたことをそのまま紹介しまして、後ほど会場の方々と一体全体、今どうなっているんだということについて話を深めていきたいと思います。

質問があれば、何を聞かれても怒りませんので、どうぞご自由にお尋ねください。

アフガニスタンは、今最悪の時を迎えております。これもほとんど日本に伝わっておりませんが、国民2400万人のうち半分、1000万人以上が飢餓状態であります。旱魃（かんばつ）は進行する一方で、特に今年は食料自給率がおそらく3割を切るだろうといわれている状態です。さらに戦乱はますます激しくなっておりまして、毎日数百名という単位で人々が死亡しているということもほとんど伝わっていないと思います。その中で何も知らないまま、コンピューターで合成されたような議論が横行しているような状態を見て、私は日本全体が『情報の密室』の中に閉じ込められているという感じがしてなりません。

ともかく今日は現地の状況と私達の活動のことを知っていただいて、今何があそこで起きているのかということ、少しでも理解していただければ幸いですと思っております。

私達の活動は「ペシャワール会」という名前のように、パキスタン北西部のペシャワールという町を活動拠点にしています。この町はアフガニスタンとパキスタンの国境地帯にあり、ここにPMS（ペシャワール会メディカルサービス）という基地病院がありまして、厳密にはここが活動母体となってアフガニスタン・パキスタン両国にまたがって医療活動を続けております。それからもうひとつは、アフガニスタンのジャララバードという町を拠点として、先ほど言いましたようにアフガニスタンは大旱魃ですので、水源対策本部を置いて飲料水の獲得、農業用水の獲得、農業そのものの支援として試験農場の運営などを行っております。これに携わっている職員が合わせて約200名、日本人ワーカーが現在20名、さらに現地の作業員を入れますと、多い時で約1000名がこの仕事に従事しております。

これを資金面でバックアップしているのが、福岡市を中心とする「ペシャワール会」でありまして、約2万人の人々の支えで年間約3億円の予算で運営されております。

アフガニスタンは日本人にとって非常に分かりにくい国のひとつであります。アフガニスタンについて知っておかないと、私達の活動が分からない。これだけは知っておいてほしいということをいくつか紹介いたします。

アフガニスタンは山の国で、面積は日本の約1・7倍、人口は2千数百万人といわれております。国土全体が山に覆われており、その山々も並みの高さではなく、6千メートル、7千メートル級の山が普通であります。東のヒマラヤ山脈と連続して、世界の屋根の西側を形作っているという地域です。国土のほとんどがこういった高山に覆われている所ですから、これが国民の生活に与える影響というのは特殊なものがあります。谷が深いために山が大きい



（講演中の中村哲医師）

い。谷が深いために谷ごとに国があるといっているくらい、いろんな民族・部族が割拠して住んでいる。しかも自治気質が非常に濃厚であるということなんですね。アフガニスタンはかつて『民族の十字路』と呼ばれていた所で、分かっているだけで20以上の民族、さらに無数の部族が入り乱れて各々この山間に住んでおり、全体としてアフガニスタンという連合体のような「国」をつくっているということなんですね。

我々が想像するのは、アフガニスタンという国があって、首都があって、民主的な選挙があって選ばれた人々（国会議員）が何かを決めて国全体がまわるというふうな考えがちなです。中央政府がもちろんありますけれども、どんなに考えてもそんな中央集権的な国ではないということです。我々は、東京（政府）が決めたことをそのまま守らなくては行けないと信じ込んでいますけれども、アフガニスタンは中央政府がどんな風に変えようと、地方はほとんど変わらないという自治意識の非常に濃厚な所です。この点が日本人には非常に分かりにくい。

さらに、あの乾いた中央アジアで2千数百万人の人々がどうやって食っていけるかということですが、実はこの山々の雪のおかげなのです。アフガニスタンの有名な諺に『アフガニスタンでは、金はなくとも食っていけるけれど、雪がなくては食っていけない』というのがあります。まさにその通りでありまして、2千数百万人の人口のうち9割以上が農民です。少数の遊牧民がおりますが、伝統的農業国家ということが出来ます。それも自給自足でありまして、自分の食べ物自分で作るということです。

農民である国民の大半は、この白い山の雪に頼って生活をしています。どういうことかと言いますと、冬に降り積もった雪、それから何万年もかけて出来上がった氷河が夏に融け出して、川沿いに豊かな実りを約束してくれます。人も動物も植物もこうやって何万年か何十万年か知りませんが、命をつないできているわけです。

近年アフガニスタンにとって危機的なのは、この山の雪が温暖化現象で年々消えつつあるということです。つまりアフガニスタンの農民たちが生きてゆく生活基盤そのものが消滅しつつあります。これが最大の危機です。

国民の100%近くはイスラム教徒で、しかも世界で最も古典的で保守的な人々です。イスラム教という我々はすぐ内乱だの自爆テロだの血生臭い話ばかりを連想し、つい暗いイメージを抱きがちですが、現地に行くと決してそうではありません。我々と同じように、そのへんを歩いている町のおじさん、おばさんとちっとも変わりません。

ただ違うのは、先程アフガニスタンはいろいろな地方の共同体が集合してできたひとつのかたまりだという話をしましたが、中央の影響をほとんど受け付けない個々の集団を結びつけているのがイスラム教であります。

アフガニスタン全体にまとまりを与えていると同時に、各地域の自治はモスクを中心に行われます。モスクというのは、キリスト教の教会、仏教のお寺に相当します。

アフガニスタンでは、イスラム教は単に個人的な信心というだけでなく、社会を、現地を束ねる社会的な絆となっているということです。この点がなかなか分かりにくい。

表向き、政府があり、議会があり、警察もありますが、一般に地方に行きますと、警察もいらなければ、軍隊もいない、精神病院もない。こういった所でもアフガニスタン共通の掟を守りながら、イスラム教のもとに団結している国だということができると思います。

大都市に行きますと、貧富の差が甚だしい。これは世界中の一般的なことでありますけれども、特にこの5年間は、アフガニスタン復興援助と称して外国の軍隊や外国のNGOがたくさん入ってきており、他方で旱魃は進む一方ということで、100万人くらいしか収容できなかった首都カーブルは、現在500～600万人の人々で膨れ上がっています。ほとんどが旱魃避難民であります。明日の職もなく、明日のごはんも食べられないという人たちが国民の半分以上で、カーブルに集まっている状態です。

カーブルは現在、貧民たちであふれており、ちょうどロシア革命前夜と似たような状態です。カーブル市自身がすでにタリバン勢力に包囲されているということを皆さんはご存知な

いと思います。火をつければすぐに燃え上がる寸前であります。

私達が現地でこのような状態に直面して特別配慮することは、医者として、医療関係者として、日本の進んだ医療をもっていけば役に立つんじゃないかという、決してそうではない。ちょっとしたお金持ちは簡単な病気でも、ロンドンや東京やニューヨークに飛行機で飛んで行き治療を受けることができます。しかし、99・99%の人々は数百円どころか数十円の薬が買えなくて死んでゆく。この中で私達が特別配慮せざるをえないのは、いかに少ない資金で、いかに多くの人に恩恵を及ぼすかということでもあります。

私達の活動は、1984年の5月、私がペシャワールでハンセン病コントロール5ヵ年計画というプログラムに参加することがきっかけで発足しました。

当時の私の任務は、2400名の登録患者に対して治療センターを充実させるということでしたが、行ってびっくり。2400名の患者に対してベッド数がわずか16床、耳に当てると怪我をする聴診器が1本、ねじれたピンセットが数本、押せば倒れるトロリー、これが当時あった医療器具の全てであります。トロリーは足が4本ありますが1本折れており押すと倒れるので、お盆のように二人でかついでいるという状態であります。医療は物や金ではないという精神論も聞きますけれども、さすがにショックを受けました。「ペシャワール会」の物心両面での活動が活発化しまして、現在に至っております。

今日はハンセン病について詳しい話はしませんが、いろいろな治療の局面があり、現在では整形外科、形成外科、眼科、リハビリテーションと、治療をアフガニスタン全土、パキスタン北部で唯一のハンセン病合併症のセンターとして機能しています。

治療している写真を見せると、私が医者で医療活動をやっていることが良くわかりますけれども、実は私達の活動というのは、一見医療とは全然関係のないところに大きなエネルギーを費やしてきたのであります。

その最大のものは、いかにして相手のことを理解するかということです。患者が何を考えているのか分からないと治療はできない。何が苦しいのか、何を訴えたいのか、どうすることで悩んでいるのか、それが分からないと治療というのは成り立たない。実は日本でも同じなのですけれども、私達は「国際なんとか活動」という言葉にだまされまして、行けばその日から活動できるように思いがちですが、決してそれはできないということです。相手のことを理解するというのは、言葉で言うのは簡単ですが、これは時間も忍耐もいるということです。30年近く一緒にいる家内の気持ちもまだ良く分からないのに、まして言葉も違う、習慣も違う所に行き、さあ明日から診療を始めて活動しなさいと言ったって無理で、これは時間がかかるんです。



(女の子の学校)

私達が彼等に言いたいのは、国際人権会議で女性差別としてこの習慣を告発するというのはあなた達の自由だろうけど、私達としては、この女性患者をどうしてくれるんですか、連れて行って診てくれるんですか、それとも、あなたのその思想が大事なのですかと問いたい。残されて面倒を見ざるを得ない家族はどうするのか、我々はどのようにして診療したらいいのか。この制限された中でも、出来る事はたくさんあるわけで、私達は基本的に、好き嫌いの問題は別にして、こうした現地の慣習に一切善悪、優劣の判断をしないということ

方針としてやってきました。文化の枠内で解決できることが、いくらでもあるわけです。

そのために、日本人の女性の医療関係者を送り込みまして、現地の女性医療ワーカーを育てるということをやりました。習慣そのものはアフガニスタン人自身が決めることであり、外国人がとやかく言うことではないというのが私達の方針であるからです。

人間というのは、そう自由なものではありませんけれども、それぞれの制限された文化の中でも、この人にとって一番幸せな状態は何なのかということを探って実現する、これが臨床医学というものではないかと思っております。

私が行った1984年は、アフガン戦争の真っ只中でした。アフガン戦争というのは1979年12月、当時最強の陸軍と言われたソ連軍約10万人が大挙してアフガニスタンに侵攻するという事件が起きました。その後10年間、アフガニスタンは内乱の巷におかれ、この戦争で死んだ者は約200万人といえますから、国民の1割ですね。さらに600万人が難民となって国外に流出し、その半分の300万人がパキスタンのペシャワール周辺に逃れるという事態が発生して、私達も医療の立場からこのアフガン難民問題に巻き込まれていきました。

始めの頃は難民キャンプで細々と治療をしておりましたが、ここで私達は大きな方針転換をいたしました。それは、現地で行われているハンセン病コントロール計画自体が先進国の発明したアイディアであり、現地にそぐわないということです。どういう事かということ、ハンセン病が多い所は同時に他の伝染病も多い。腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アメーバー赤痢と、ありとあらゆる伝染病の巣窟であることが多い。同時にハンセン病の多発地域は、医療設備のほとんど無いアフガニスタン山奥の村々であることが多いと知りました。マラリアで死にかけている人に対して、あなたはハンセン病でないから診ませんというわけにはいかない。

そこで、私達は現地に即したやり方として、アフガン戦争が下火になったあかつきには、アフガニスタンの山奥の貧しい村々、即ちハンセン病患者がたくさんいて、他の病気もたくさんあって、しかも医療設備がないという無医地区に診療所を建てることにしました。

ハンセン病は、いろんな病気のひとつとして特別扱いせずに診るという方針を打ち出し、アフガニスタンの無医地区における診療モデルの確立ということ、もうひとつの大きな目標として掲げるようになりました。

そのために、診療所開設予定地の人々と付き合いを深めていきました。といってもアフガニスタンは山また山という所ですし、国境を越えてと言っても赤い線が引いてあるわけでもありません。アフガニスタンとパキスタンの2千キロメートルの国境は絶対に閉鎖することはできません。我々は戦火を避けながら、谷から谷へ、村から村へと歩きながら人々との付き合いを深めていきました。

ヌーリスタンと呼ばれるアフガニスタンでは最も高い所に住んでいる民族があります。ここにも私達の診療所がありました。標高が2500～3000メートルあります。当時「ペシャワール会」は歩いたり、時々ジープに乗ったりして、たどり着くのに片道1週間は最低かかりました。足の弱い人を連れて行くと10日かかります。これがアフガニスタンの山岳部の村々の一般的な姿です。その状態は今も変わっていないという事は是非知っておいてほしいです。道路はあればいいほうで、自動車で行ければいいほうというのが、実情でありまして、これはほぼ昔と変わっていません。

ここに行った時に、いつもみんなに言うのですが私はフランス人に間違えられました。チャイニーズか、ジャパニーズかと聞かれた事は何遍もありましたが、フランス人というのは初めてでさすがにびっくりしましたが、あんまり悪い気はしなかった。その後知ったのですが、村長さんがたまたま外国というとフランスという国しか知らなかったのも、フランス人かと聞いたらしいということでした。

私が日本人だと言うと、手のひらを返したように親切にしてくれました。単に日本人であるがために命拾いをする、単に日本人であるがために仕事の協力がうまく進むようになると

ということが数知れずあったわけです。それだけ日本の受けが良かった。

彼らが日本について想像するのは広島、長崎。このふたつはどんな山の中に行っても、どんな学問のない人でもみんな知っている。日本人の知らない非核3原則なんていうのも知っている。日本はあの戦争の惨禍から見事に立ち直って、今日の繁栄を築いたということも、彼らはよく知っているんですね。

羽振りのいい国というのは必ず戦争をする。しかし日本はあれだけ復興しながら、内実とはとかく戦争を外交手段として用いなかったということに非常に好感をもたれている。やろうと思えばやれるけれども、あえてそれをやらない平和な国日本という美しい誤解が根を下ろしておりまして、そのご先祖様のおかげで私達も自由自在に活動ができたといったことがありました。皆さんに是非伝えたいのは、最近5~6年の変化により日本はとんでもない、そんな平和な国ではなくて、ちょっとした経済利益のためには戦争も辞さない国なんだということが、現地の人々に少しずつ定着しつつある。単に日本人であるがために攻撃の対象になる、単に日本人であるがために仕事の妨害をされるということが、現在普通になりつつあるということを実地からお伝えしたいと思います。

その後の経過については詳しく申し上げる時間はありませんけれども、世界最強の陸軍と呼ばれたソ連軍10万人が10年ももたずに撤退を始めます。1989年2月ソ連軍は全部隊が撤退します。その後しばらくソ連軍とアメリカ軍の武器援助合戦が続き、内乱状態がさらに混乱しまして、1992年共産政権が倒れます。それまでアメリカの軍事援助と資金で肥え太った軍閥たちが、カーブル目指して次々と攻めのぼるという中で、これまで戦場であった農村地帯が平和になり、都市部では市街戦が普通になるという状態になります。

この状態を、大部分が農民である難民たちは正確に読んでいまして、1992年の5月から12月まで、わずか7ヶ月の間に270万人いたペシャワール周辺の難民のうち、200万人が誰の力も借りずに帰還し、独力で復興を始めるということが起こりました。このことはほとんど世界に知られることはありませんでした。私達の現在ある診療所も全て当時建てられたものであります。

そうこうするうちに15年が経ちまして、どうも先が長そうだと我々は見ておりました。アフガニスタン問題もハンセン病問題も同じで、話題性がある時は人も物も金も集まりますが、話題性が去っていくと潮のように引いてしまうということがあります。

ハンセン病もそうで、あれだけハンセン病コントロールが世界中で騒がれている時は、私も我もと押しかける人たちがたくさんいたのに、話題が去ってしまうと嘘のように消えてしまう。患者は増える一方で、2400名だった公認患者が3年前は7000名を突破するという状態です。ハンセン病のまともな診療機関が次々と無くなってゆく中で、私達は先が長いと言うことを観念しまして、15年目をきっかけとして1998年4月パキスタンのペシャワールに自前の病院を建てました。病院を建てたということは、ここに土着化する、その地域に根を下ろして何年でも頑張るという体制を敷いたわけであります。

さあ今からという時にアフガニスタンを襲ったのは世紀の大旱魃。アフガニスタンという国は非常に気の毒な国でありまして、タリバン政権の統一によってやっと治安が良くなり、これならみんな活動しやすくなるだろうという時に大旱魃が襲った。2000年5月WHO（世界保健機関）が発表した内容は恐るべきものでした。現在進行中のユーラシア中央部の大旱魃は、おそらく人類が体験したことのない規模で進みつつあって、2000年5月当時の推定で約6000万人が被災したと言われています。

そのうち最も激烈な被害を受けた所がアフガニスタンで、約1200万人が被災し、約500万人が飢餓線上にあり、さらに100万人が餓死線上にあるという警告を発しました。

しかし、このWHOの警告にもかかわらず、国際支援らしきものはついに現れなかったわけであります。実際、私達の診療所の周りでも村が丸ごと本当に消えてゆくんです。昨年まで緑豊かな村々が次々と砂漠化して、一木一草もない半砂漠地帯になるという現象がアフガニスタン中で見られました。当時、家畜の9割が死滅したと言われております。

100万人餓死というのは大げさではないかと思われる人もおられるでしょうが、ありうることです。餓死の末期というのは、決しておなかがぺこぺこになってバツリ倒れるという死に方をする人はいない。たいていが栄養失調になり抵抗力が弱って、そこに赤痢などの腸管感染症の下痢症に罹りコロリと死んでしまう。特に子どもは生活廃水を平気で飲むために赤痢に罹る。

普通なら赤痢ぐらいで死ぬことはありませんが、背景に栄養失調があるので抵抗力がなくすぐ死んでしまう。診療所でも、小さな子どもを抱いたお母さんの姿がだんだん目立ってきました。時には何日も歩いて診療所にやって来ます。生きて辿り着くのはまだいい方で、外来で待っている間にお母さんの胸の中で冷たくなるという光景が、ほぼ日常的に見られました。

これらの事から考えますと、餓死者100万人というWHOの警告は誇張ではなかったと思います。しかもこの状態が現在も進行しながら、さらに悪くなりながら続いているということもほとんど報道されていません。皆さんが映像でご覧になるアフガニスタンというのはほとんどアフガニスタンの中では非常に特殊な首都カーブルの、それもきらびやかなごく一部の現状であります。

アメリカに擁立されたあのカルザイ政権自身が、国民の半分以上がまともに食っていけない状況の中で軍事行動どころではないという事をはっきり言っている。

この危機的な状況はさらにひどくなりつつある事を皆さんに是非お伝えしたいと思います。

栄養失調とか喉の渇きは薬では治せません。病気のほとんどが清潔な水や食べ物さえあれば罹らないということができる。そこで2000年7月、私達はとりあえず残った村人達を集めまして、枯れ井戸を再生するという清潔な飲料水を獲得する活動を始めました。

（井戸掘りの様子）



この活動は現在も続けられており、2007年4月現在、アフガニスタン東部で1500以上の井戸を掘り、30数カ村で約40万人前後の人々がまずは村を離れなくてすむという状態を作り上げてきました。アフガニスタンはほとんどが農民であり自給自足の生活をしています。

農業用水がないと食っていきません。そこで始めに手がけたのは診療所周辺にあるカレーズ（伝統的地下水路）を再生することにしました。カレーズというのは簡単にいうと横井戸で、百数十メートルを真横に掘って地下水を水平に導き出すという伝統的な灌漑方法ですが、名

前はカレーズでもこれが枯れるのですね。それで私達は診療所周辺の40本のカレーズのうち9割以上を再生して村の復興に尽くしました。

2000年9月診療所付近は、ほぼ一木一草もなくせめて雑草でいいから生えてくれという状態でした。7ヵ月後、カレーズを再生して水を流してやると同じ地域が緑の小麦畑になったのであります。水の威力というものを初めて知りました。

私達外国人が、復興支援プロジェクトとか難民帰還プロジェクトだとか大げさな事を言わずとも、そこで生きていける条件を作ってやれば皆ひとりでに帰って来ます。

村人約9000名が水が出たという噂だけで戻って来て、自分たちで耕して再びそこで元の生活をするという奇跡のような現実を見て、水の尊さを初めて知ったわけであります。

こんな大変な事が世界的な話題にならないはずがない、そのうち大挙して国際支援が押し寄せて来て、この旱魃対策が始まるだろうと思っていたら、やって来たのは国際援助ではなく国連制裁でした。2001年1月国連はアフガニスタンに対して国連制裁を発動します。

その理由は前年の2000年10月、ペルシャ湾でアメリカの駆逐艦への自爆攻撃がありアメリカ軍の将兵十数名が死亡するという事件がありました。それに対する報復措置として、国際テロリスト・アルカイダをかくまうタリバン政権を制裁するという国連決議が発動され

ました。これが転換点でした。繰り返しますが、これがアフガニスタンの変わり目でした。

100万人が餓死寸前というところに食べ物まで国連が制裁しようとした事は、人々にとって忘れ難いマイナスの記憶になりました。しかも割拠といいますか自治意識が非常に強い地域で、人々の一般的な思いというのは、中央のタリバン政権がどうしたこうしたという事のために何で我々がこんなひどい目に合わなければならないのかということだったと思います。

それ以後のアフガニスタンでは外国人嫌いが蔓延してきます。さらにこういった追い詰められた状態では皆が過激な考え方に走りやすいわけで、タリバン政権の中でも穏健な人から非常に極端な狂信的な人までいろいろいましたが、過激な人の意見が主流になってきます。

その後バーミ안의仏像破壊事件とか9・11テロ事件がありますと、もう一人の原理主義者アメリカ大統領のブッシュがアフガニスタン報復爆撃などと言い出す。私がブッシュを原理主義者と言うのは、キリスト教原理主義者と言うべきでありまして、本来キリスト教とは何の関係もない報復などという言葉は聖書のどこにも書いてありません。私はブッシュと同じ教派に属するバプテストのキリスト教徒ですが、非常に恥ずかしい思いをしました。「仕返しをするな」ということは書いてありますが「仕返しをして罪のない人まで巻き添えにしてしまえ」ということは一言も書いてありません。しかも十字軍なんていう言葉も聖書のどこにもないものであります。

案の定2001年の10月になって空爆が開始される。当時私達が主張したのは、アフガニスタンは戦争どころじゃないんだ、アフガニスタンに必要なのは爆弾ではなくパンと水なんだということでした。一部の心ある人々を除き、概ね、まあアメリカがやっているんだから逆らえないということで、私が今と同じ事を言いますと「あれはテロリストの味方だ」とか言われました。

しかし、心ある人はいるわけで、私達が「アフガン命の基金」を呼びかけますと多くの募金が寄せられました。それによって私達は空爆下のカーブルで餓死寸前の人々に食料配給を行うことが出来ました。あの当時のことを思い出しますと、本当に日本中がおかしかった。一番不愉快に感じたのは皆がテレビの映像にかじりついて、今度はどこがやられる、ここがやられると、まるで野球のゲームでも観戦しているように戦争を見ている姿でありました。軍事評論家という人々の中には、あれはピンポン攻撃といってテロリストだけをやっつける攻撃なので、一般の市民たちには被害が少ないという事を堂々と言っていた。今でこそ誤りだとはっきりしていますが、「本当かどうか、あなたは見たことがあるのか」「まず弾の下にいる人たちのことを考えてみてください」と言いたかった。日本人全体が、人が生きて死ぬということの重大さについて希薄な観念を抱いていると思わざるをえなかったわけでありました。

ともかく、配給チームの職員20名を送り出す時に私が言ってきたのは、「かたまるな」ということです。アメリカは無差別攻撃そのもので、赤十字もやられる、アルジャジーラ（放送局）もやられる。一発の爆弾で20名全員が死亡しますから、これを3つの部隊に分けて、たとえ1部隊が全滅しても残る2つの部隊が任務を継続するようにという事でした。

このようにして空爆下、約1800トンの小麦粉を餓死寸前の人々に運びました。よく私独りで活躍したように言われておりますが、実際の現地の活動は、同胞のためなら自分の命でも投げ出すような勇敢なアフガン人たち、それから良心的な日本の人々、こういった人々の力によって出来たものであります。

11月になってタリバン政権がカーブルからずっと消えると、その後に流された映像が世界中を欺きました。悪の権化タリバンが打ち破られて、無限の正義、絶対の正義の味方アメリカとその同盟軍を歓呼して迎えるカーブル市民の姿というのが繰り返し流された。ブルカを脱ぐ女性たち、タリバンの圧政から解放されて自由を喜ぶ国民の姿というのが繰り返し流された。戦争に反対していた人々も、「いろいろあったけれど、これで何となく落ち着くのかなあ」という漠然とした印象を残したままアフガニスタンは忘れ去られていったわけでありました。

そこで、いろいろな「自由」が解放されました。例えば「ケシ栽培の自由」です。現在アフガニスタンは世界の麻薬の93%を1国で供給するという不名誉な麻薬大国に転落している。さらに難民はますます増加の一途を辿る。農村の早魃はますます進行し農地の砂漠化が進行してゆく。

前述のように首都カーブルは100万人程度しか吸収できなかったのに、現在500万人以上の食えなくなった国内難民が溢れている状態です。それに呼応するように、旧タリバン勢力が首都を包囲しています。

「解放」されたのは、麻薬栽培の自由、女性が売春する自由、空爆で夫を失った主婦たちが街頭で乞食をする自由、耕せなくなった農民が餓死する自由、英語が上手で外国人におべっか使うのが得意なアフガン人たちがますます金持ちになってゆく自由、これらが解放されたと言って言い過ぎではないと思います。

このことを現地で言いますと、テロリストの味方だといって逮捕されたり殺されたりする恐怖政治、これがアフガニスタンの現実であることを是非知ってほしいと思います。

今まで私達は方針を変えたことがなかったし、これからも変えないだろうということで活動を続けてきました。時間はかかりますけれども、試験農場では6年をかけてサツマイモや日本米の普及などに取り組み、少しずつ成果が見られるようになってきました。

砂漠化、乾燥化というのは地球温暖化と切っても切り離せない状況であります。かつては雪がそこそこに降りまして、ヒンズークシュ山脈の白い雪がアフガニスタンの巨大な貯水槽の役割を果たしていた。ところが今は、春先に大洪水が増えるけれども、どっと融け出して、その後カラカラになるという状態。この状態はおそらく収まらないだろう。

実際この6年間、年を追って常に右肩下がりに状態が悪くなっている。特に今年は川の水が減ってきたときに米、トウモロコシはほぼ全滅に近い状態であり、アフガニスタンの食料自給率は3割を切るだろうとされています。つまり3割くらいの人しかまともに食っていない状態になるということです。

私達としては、地下水も減ってくる現在では雨水あるいは地表に降りてくる水の有効利用しかないという結論になりました。大河川、インダス河の支流というのは、いくら支流といっても日本の一級河川の数十倍の規模はありますので、こういった水の豊富な河はおそらく数世紀は枯れないだろうという前提で、大河川には取水口を作り用水路を引こう、中小河川では無数の溜池を作り対処しようという方針を立てました。

その第一弾として、まずこれを実証しよう。議論だけでは人を説得できないというのが現地の現実であります。我々医者も、手術は成功したけど患者は死にましたなんてことは言えない。ともかく事実をもって証明することが1番の言葉であります。

今から4年半前に全長20キロメートル、一期工事13キロメートルの工事に着手しました。この間いろいろな苦労がありましたが、やっと今年4月になって第一期13キロメートルの工事が終了し、第二期7キロメートルを年度内に片付けて、ほぼ4000ha以上の地域が灌漑面積に入ろうとしております。

かつて牧草が生え、所々には水田も見られた地域が次々と砂漠化し、土漠（どばく）の荒野になってしまうという所が急速にアフガニスタンに広がっています。我々は、一部でもいいからこのような所に、まだ打つ手があるんだという事を実証して、これをアフガニスタン全土に広げようという意気込みで取り組み始めました。

始めの頃は、何もない。日本のようにゼネコンがあるわけじゃないし、機械力もないという中で、戻ってきた農民たちのツルハシとシャベルが頼りで、正に人海戦術によって、地元



（ サツマイモの収穫を喜ぶ人々 ）

の農民たちと力を合わせて作ったというのが実態でありました。

それにしても何がしかの新しい技術を導入しないと出来なかったわけで、日本の技術が大いに活躍しました。といっても現在のようにコンクリートをふんだんに使った工事ではなく、大体は武田信玄の時代、戦国時代末から江戸時代にかけて完成した治水技術それが非常に役に立ちました。私を含めておそらく皆さんも、明治維新後にヨーロッパから優れた文明が入ってきて、日本はここまで優れた国、進んだ国になったのだと信じておられたかもしれませんが、この工事を通して知ったのは、日本の農業土木技術は当時世界に冠たるものがあったということで、現地で大いに活躍したわけであります。

そのひとつが蛇籠（じゃかご）と呼ばれる物で、これは簡単に言うと長方形の金網の中に石を詰めて護岸をする工法ですが、これが大活躍しました。

水を通していろいろな苦労がありましたが、水路を蛇籠で護岸し、周りに柳を植えました。これを「柳枝工（りゅうしこう）」といいます。この柳が3年で6～7メートル位に成長します。13キロメートルの水路に合計12万本の柳が植えられました。すると蛇籠の石のすき間にずっと根を張って、たとえワイヤーが切れても石垣が崩れない。つまり生きた籠として石を抱くように根が生えてくる。これも昔の人の知恵ですね。これが非常に活躍したということなのです。

私はこの4年間、時々医者の仕事もしていましたが、ほぼ用水路現場で作業をしておりました。私達は地域住民から攻撃されたことは、ただの1度もありません。皆さんはおそらく勘違いなさっておられると思いますが、タリバンというテロリストがいて、彼らがアフガニスタンの復興を邪魔するので、アメリカ軍を中心とした外国軍が進駐していると思っている。私が見た事実は逆で、それまで平和であった所が、外国軍がテロリスト掃討と称して入って行くと、そこが戦場になる。こうやって私達は奥地のふたつの診療所を失うという事態に立ち至ったわけであります。

私達を攻撃する者は地元にはいませんけれども、米軍が面白半分なのか我々を敵視しているのか、機銃掃射していくということが何回かありました。初めの頃は、さすがに住民は怒りまして「今度米軍の装甲車が通ったら、インダス河にたたき込む。」というので、私が「ちょっと待て。（インダス河にたたき込むことは）悪い事とはいえないが、水路が出来上がってからゆっくりやってくれ。」と言いました。すると、いきり立っていた人達が「そうだな。うちは子沢山だから、早く水を畑に送って食べ物を作るようにしなくちゃ」とか「かーちゃん、あんなに遠くまで水を汲みに行っている。」という風に、ここはカッカとせずにまず食うことが先だと、普通の人間の気持ちになるんですね。

現地では農民であることは同時に兵士でもある。普段はおとなしい、にこやかなおじさんが、事あるとライフル銃を担いで勇敢に敵と戦うというのが普通であります。ちょうど日本の戦国時代に侍と農民が未分化であったような社会であります。こういう人達に「明日から日当を2倍出すので、ライフルを持って集まれ。」と言えば、一個大隊くらいの武装勢力がでないことはない。しかしそんな事はしたくありませんし、まして募金の金で武器を買ったりすることはできない。私達としては、それ以前に生きてゆくことが先だということで、住民と一体になって仕事を進めているわけであります。

「斜め堰（ななめぜき）」と呼ばれるものがあります。これはかつて日本で飢饉が普通に見られた時代に我々のご先祖様たちが苦労に苦労を重ねて、いかにして洪水を切り抜けるか、渇水を切り抜けるか工夫したひとつの成果であります。かつて全国に見られましたが、今は九州に残っております。この方式は非常に優れたものでありまして、大洪水が来ても、渇水状態になってもほぼ一定した水が水路内に取り込まれるというもので、日本の農業土木技術の勝利であります。渇水対策が溜池でもできるという事も実証されており、近い将来多くの溜池がアフガニスタンで人々を救うことになると思います。

九州の熊本に「十連樋門」（注1）というのがあり、それも現地に取り入れました。いかに

して上澄みを取るかという課題でも、日本の「堰板（せきいた）方式」を採用しました。これも私たちのご先祖様が考えた非常に優れた浚渫（しゅんせつ）方法でありました。

※（注1）「十連樋門」（じゅうれんひもん）

雨水や水田の水などが川や水路を流れて、より大きな川や水路に合流する場合、または合流する川や海の水位が洪水や大潮などで高くなったときに、その水が逆流しないように設ける、開閉できる水門。

このようにして2年前から、やっと灌漑が始まりました。不可能と言われた難所をやっと通過して、灌漑が始まったのは着工から2年後でした。もとは砂漠だった所が水田地帯になるという奇跡的なことが起きました。土石流の谷もこうやって通過しました。

今年の4月になって、第1期工事13キロメートルの一番難しい所がやっと完成して、皆とても喜びました。これによって今年10月現在で約2000ha（2000町歩）が私達の水路によって潤うという奇跡的な状態になりました。それまでパキスタンに逃れていた難民たちも次々と帰って来まして、緑豊かな田園が広がりつつあります。

水路だけでなく、日本の河川土木工事技術というのは偉大なものがあると思いました。決壊しかかった水路も、日本の昔のやり方で見事に食い止めました。「捨石水制」と呼ばれる伝統的な護岸技術ですが、これが見事に水路の決壊を防いだのです。

こうやって13キロメートル地点まで水路が作られ、さらに延びつつあります。4年前立ちすくんだ荒野が今、緑に変わっています。水の偉大さを感じます。これは我々が偉大なのではなく、この水を与えてくれる天が偉大なのです。私達外国人がこうしたらいいとか、これが絶対に正しい考え方だとかいうことではなく、こうしたら人々に恵みを与えることができるというひとつの例であります。平和の基礎というのは武器ではなく、水と緑によって取り戻されるのだということが私達の体験であり、確信であります。

第2期工事の約半分は完成しつつあります。年度末に7キロメートルが延長されますと、これで約5000町歩が潤うことになり、10数万人が生活できるようになります。こうやってアフガニスタンのごく一部ではありますが、私達の工事はコツコツと続けられております。外国人はいつか出て行く。しかし、その地域にしがみついて生きていかなければならない人たちを主役として、私達の活動を今後も良心的な日本の仕事として続けていこうと思っております。

暗い話ばかりしましたが、それではアフガン人が暗い顔をして生活しているかという決してそうではない。手伝いに来ている日本人の青年の方がよっぽど暗い顔をしている。これは何だろうか、この20数年間思い続けてきましたが、やはり何もなくなるものがない人の楽天性というのは確かにある。我々はあまりに多くを持ち過ぎたという感じがしています。それが金であれ、物であれ、名声であれ、持てば持つほど人間の顔というのは一般に暗くなってきた、お上手、おべっかが増えていくというのが私の意見であります。

情けは人のためならずと言いますが、私達はこの活動を通して、貧しい人々を助けてやろうという思い上がった気持ちが初めの頃なかったわけではありません。今となって切実に思いますのは、私達が最後の最後まで失ってはいけないものは何なのか、これはなくたっていいというものは何なのかという事について、ひとつの示唆を得た気がいたします。

少なくとも私達は、今世界を覆っている「金さえあれば何でもできるんだ」という迷信、「武器さえあればこの身が守られるんだ」という迷信から自由であります。それを超えて単に私達が貧しい人にしてあげるという行為だけではなく、現地の人々と一体になって、人間のあるべき在り方というのは何なのかを探りながら進んでゆく、共通の良心の事業として今後も続けて行きたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

質 疑 応 答

質問：この前ミャンマーで軍事政権に対するクーデターがありましたが、それに関する記事で、日本がミャンマーに対して経済制裁をするべきだという主張を読みました。

今朝のニュースでも、アメリカがイランに経済制裁を強化するとかいう内容の報道もされていきました。2001年アフガニスタンも国連から経済制裁を受けていますが、各国の事情はいろいろ違うかと思いますが、アフガニスタンの場合、一般市民のレベルでどのような変化があったのか、もう少し具体的にお聞かせください。

中村：それはいい質問です。私達はミャンマーというとミャンマーという政権があつて、その政権が悪い事をしたのでミャンマーをやっつけろという考え方ですね。

ところが実際に私達自身のことを考えると分かるように、今の政府は自分たちの思った通りのことをやっているかということと必ずしもそうではないわけです。今の政府のしでかした不始末のために日本全体が制裁されたというふうに、相手の立場に立って考えれば分かることです。

厳密にいうとミャンマー人というのは存在しないわけで、いろんな民族、いろんな考え方をした人がいるわけです。それをまとめて制裁という形で行うのは、あまり効果のないやり方であるどころか逆効果になるというのが、2001年1月の国連制裁で私が見てきた事実であります。繰り返しますが、あれがきっかけでした。国連制裁を契機として、かえって過激な主張が国内でまかり通るということになりました。

それまで曲がりなりにも国際社会と手をつなごうとしていたタリバンの普通の人たちが力をもたなくなったということがあります。

ですから、力によって何かを治めることはできないと思います。もちろん、してはいけない事、しなければいけない事はあると思いますが、制裁や武力という形では逆効果だったことがほとんどでした。アフガニスタンがそうでありました。あの時、国連制裁がなければおそらく仏像破壊もなかっただろうと、当時外相をしていたムタワッキル氏というタリバン旧政権の代表が証言しています。何か悪い事があるからといって制裁という形で応ずることは非常に良くないことのひとつではないかと思います。まして武力制裁に加わることは絶対にしてはならないと思っております。

質問：いろいろお話を聞いて、アフガニスタンという国の政策というようなものが感じられないというか、見られないという感じを受けました。

国としての医療政策、農業政策、食料政策などが、先程のお話にあったように自立性が非常に高い地域の集合体のような国ですと、国としての政策はあまりないのでしょくか。

それと、もうひとつ、そのような複雑な事情の国に対して日本が国として援助する場合、どのような方策が考えられるのか。先生の個人的なご意見で結構ですから、ひとことお聞かせください。

中村：まず国家というものに対する考え方が、アフガニスタンでは根本的に違います。

(録音テープ空白) 何か重大なことが起こると、そこに大きな力を投入し、例えば早魃(かんばつ)があると水利施設を作るということが昔は普通に行われていたので、皆はそこを中心地と仰いで暮らしていたわけです。しかし現在、45億ドルの金があフガニスタン復興支援として決まりましたが、そのうち7割以上が国連とかNGOとか外国の団体を通じて行われています。アフガニスタン政府は、せつかく政府の立て直しといわれながら、官吏に

払う給料さえない、公務員に払う給料さえ事欠くという状態の中で、外国人のアイディアがあまりに優先されているという実態があります。しかしそれに反対すると、反米的とかテロリストに味方する者とかの烙印を押されて身動きがとれないというのが、現在の政権であります。

現政権自身が米軍の支援によって無理やり作られた政権であります。国民に対しては説得力がない。そのような悪循環のために、この状態を解消しないと今のアフガニスタンにおいては、おっしゃるように援助はできにくい。

もうひとつ、国としてすべき事はあるかということは、はっきりしています。

「何をなすべきか」という以前の問題で「何をしたらいけないか」ということをまず考えなくてはならない。日本はせっかちで、これをやめたら他に何をやるのだという議論の中で煙に巻かれていますが、まずしてはいけないのは人殺しです。人殺しの手伝いをしてはいけない。これは、はっきりしています。

あらゆる戦争プロセスを拒否して、ともかく復興プロセスに日本が関わるという事を明言し、それに向って準備する。これだけで相当インパクトがあります。

アフガニスタンの現状というものがなかなか伝わりませんが、2007年10月現在の実態は南部、東部を中心に既にタリバンの「面」の実効支配がじわりじわりと進んでいます。首都カーブルは、ほぼタリバンの実効支配で包囲されているという状態です。

日本国内でそう言う、「お前はタリバンのスポークスマンか」というようなことを言われる。タリバンというのは、国粋主義運動でありまして、彼らがアフガニスタン国境を越えて他国に影響をもつ可能性は限りなく無い。ですからアルカイダとの結びつきも一部にはあったでしょうけれども、同じイスラム教徒であるからという資金面での援助があったという以上のものではない。その点の分析もないまま、「タリバン＝悪の権化」対「正義のアメリカ」という図式をまず洗い直すということを始めないと、まともな支援はできないのではないかと思います。

脱線するようで申し訳ないのですが、現在カーブルで進行しつつある事実を申し上げます。100万人しか吸収できない都市に500万人以上の人口が溢れている。これは、農村から食えずにたたき出されて来た農民たちです。しかしこうやって逃れて来ても職がなく、カーブル市全体がほぼ革命前夜という状態です。誰が火をつけても、いつでも燃え上がる、爆発寸前の状態であります。

「悪のタリバン」ということで、米軍およびNATO軍が国連の承認を得ていると称して出動している。その実態は、例えばある州でタリバンの支配勢力と中央から派遣された州知事が「まァアフガン人同士だから仲良くしとこうや」というところに、NATO軍がやって来て空爆を加える。始めは地上軍を出していましたが簡単に襲撃されますので、今度はヘリコプターを出す。ヘリコプターを出すと撃墜される。撃墜されると戦死者が増えますので、国内で反戦運動が起こる。そこで最近ではジェット機で、わずか数名のタリバン要員がいるというだけでその村を攻撃するという状態です。そのために死亡するのは、ほとんど一般の農民や市民であり、それも数十名という単位ではなく数百名という単位で死ぬという事が、ほぼ毎日のように起きている。それに対して外国人に対する敵意がますます燃え上がっていくという実態にあります。

首都はいつでも陥落させられる状態にあります。旧タリバン政権の要人というのは現在カーブルにいまして、カルザイ政権自身も水面下で話を進めているということも日本では知られていない。小田原評定ではないですが、インド洋上で油をやるだのどうだのという議論は現地の人々にとっては、ほぼどうでもいいような事。あのカルザイ政権でさえ米国に対して「この4、5年の間に軍事費に300億ドルも使っているが、復興援助よりも7倍も多いではないか。これだけの金があったらアフガニスタンはもっとまともな国になったでしょう。」というようなことを言う中で、日本の議論を見ていると非常に現実離れをした、我々とは無関係な人達の話のような気がするわけであります。

そういった中で日本がやるべき事というのは、まず殺さない、つまり戦争プロセスからは一切手を引いて、復興プロセスだけに関わる事です。

しかし、あわてる必要はありません。何が必要かをまずきちんと調べる。学校も必要だし、道路も必要です。けれども人々が生きていく上に大切なものは何かというと、これは9割以上の農民にとっては水そのものなんですね。

現にイランが大きな用水路を、我々が工事している河の更に上流に計画しているという中で、日本の土木技術は、今の日本国内でやればひんしゆくをかうような技術でも現地で行うと感謝されるような技術もたくさんあるのです。

まずはこの復興プロセスあるいは和解プロセスに関わる事だと思います。

脱線して長くなりますけれども、タリバンが天下を取ろうと反タリバンが天下を取ろうと、これは彼らの内政問題であって外国人がとやかく言うてはいけません。

例えば、武田信玄が天下を取るか、上杉謙信が天下を取るかという時に、突然よそからキリシタンバテレンがやって来てどちらかに味方したという構図に近いわけです。私達としては、どちらが天下を取ろうとアフガニスタン人の民族自決、アフガニスタン人の自由ということで、アフガニスタン復興に支援するという事を明確に打ち出してゆけば、やる事はたくさんあるのではないかと思います。

ともかく殺さない。戦争に参加しない。これで相当のインパクトがあるはずです。

テロリストの温床となっているのは決してアフガニスタンではありません。それはアメリカやヨーロッパをはじめとする先進国の社会の病理が、ああしたテロ実行犯のような人々を生み出す温床になったのです。実際にテロ実行犯の中にアフガニスタン人というのは一人もおりません。大抵はドイツ、フランス、イギリス、アメリカで教育を受けたイスラム教徒の青年たちが、そこで生きがいを見つけられず過激な思想を持つようになってゆく。こういった先進国の病理がテロの温床でありまして、皆さんはこれに騙されてはいけないという気がします。これが私の答えです。

質問：アメリカ軍が空爆して、劣化ウラン弾によるアフガニスタンの土壌汚染が進んでおり地下水汚染が通常の2千倍というふうに聞きましたが、現状ではどのくらい汚染が広がっているんでしょうか。

中村：劣化ウラン弾が使われたらしいということはどうも本当のようで、普通の爆弾では考えられないような貫通力があるものが投下されたということはみんな証言している。その後国連が調査に入りましたが、いつの間にか発表しなくなった。勘ぐれば何らかの政治的圧力があったという可能性があります。

その他にも、クラスター爆弾がさかんにばら撒かれたということをみんな忘れている。クラスター爆弾というのはご存知のように、ちょうど空き缶ぐらいの大きさのものを詰め込んで落とす爆弾です。半分くらいが爆発し、半分くらいが飛び散り地雷のように残る。おもちゃのような色をしているので、子どもがそれを拾い爆発して死ぬということがしばしばあります。これが大量にばら撒かれる。

明らかに劣化ウラン弾が使われた。大量のクラスター爆弾がばら撒かれた。我々はこれらの見本を持っている。やられた村も知っている。しかしこの事もほとんど話題にならないまま、全てがデモクラシーだとか、民主主義だとか、自由だとか、自由主義だとかいう名のもとに封殺されていったというのが現実ではなかったかと思います。劣化ウラン弾は確かに使われたと私は思います。

さらに付け加えたいのは、ニューヨークのテロで死亡した3千数百人の人々に対する悼みの声は世界中から届けられましたけれども、アフガニスタン空爆によって死んだ罪もないアフガン人に対する悼みの声はほとんど聞かれなかった。この空爆によって、NYテロの数十倍の人々、10数万人が犠牲になっております。

劣化ウラン弾が使われたというのは、おそらく事実、そして何らかの口封じがあったとい

うのもおそらく事実、こうして事実隠されたまま、人道主義という言葉自身が戦争の小道具に変わってしまったというのが、ここ5～6年の変化ではなかったかと思います。

質問：二つ質問があります。一つは、今日アフガニスタンの現在の本当の姿というのを伺い、例えばこの会場にいる一人一人が、アフガニスタンのためにできる事は募金以外に何かありますか。もう一つは、様々なプロジェクトを引っ張るために中村先生が素晴らしいリーダーシップを発揮されていますが、何よりも先生自身の心と身体が健康が第一だと思います。健康管理のために、先生の元気の源というものが何かありましたら教えてください。

中村：アフガニスタンのためにできる事、これはいろいろな立場で随分違うと思います。アフガニスタンだけが困っているわけではありませんので、日本中がアフガニスタンを助けないと非情であるとは思いません。それぞれの立場で違うと思います。

お金を出すだけで充分役に立ちます。いろいろ言っても、やっぱり労働者に払う賃金が無いと現地の活動はまわらない。鉄筋を買ったり、コンクリートを買ったりしないと橋も作れない。ですからお金を出すことは、決して「ただ出すだけ」だとは思いません。

お金も出せなければどうするか。考えてくれるだけでいいとは思いますが、何が本当なのかということですが、先程言いましたように世界中が金さえあれば何とかするという中で、金がなくても幸せというのはあります。

江戸時代の人は皆、不幸せだったのか、縄文時代の人は皆、不幸せだったのか、私はそうとは思いません。人として幸せなことというのは、いつの時代でも、どんなに場所が変わっても、あったんじゃないか、これからもあるんじゃないかと思うんです。

目先のものに騙されない、このことだけでもアフガニスタンを助ける間接的な力になってゆくんじゃないかと思います。

どういう事かということ、アフガニスタンを苦しめているのは、世界の欲望とでもいうべきものです。民主主義を振りかざし、自由主義を振りかざし、その主義主張が通らないと、その人全部が不幸であるかのごとく言い、人権を大事にすると称して人殺しをしながら、人権を守るというのはあり得るのか。こういった事を知ることにもひとつの助けになるんじゃないかと思います。

アフガニスタンだけではなく、例えば北朝鮮がミサイルを飛ばすから危ないので、こっちも何かを持たなければと、いとも簡単に武器を持ち出してくる考え方、このようなことを日本人が改めない限り戦争というものは続くのではないかと思います。

アフガニスタンを助けるということは、建設を助けるということもありますが、破壊を防止するということもひとつの意味があるんじゃないかと思います。

繰り返しますが、アフガニスタンのためにできる事はいろいろありますが、自分の立場で、金もよし、考えるだけでもよしということではないかと思います。

次に、どうやって自分の健康を保っているかということですが、実は私もよく分かりません。現地に行くのは大変ですねと言われますが、現地ほど健全な生活はありません。私は朝4時に起きまして、5時から作業が始まります。電気がありませんので、夜は8時頃もう寝るんですね。お日様と共に起き、身体を使って仕事をして、帰って来て「あぁ一日が終わったな。働いたなぁ。」という実感。これが何よりの幸せで、私は仕事中毒と言われますけれども、幸せな毎日でございます。

こういった高い所から人の前で分かったような話をするのは、一番苦手なんです。ですから私がどうやって健康を保っているかということ、身体を動かす仕事、百姓仕事もよし、手術するもよし、現場で重機を使って作業員の一人として働くのもよし、そうやって働くことが私の元気の源のような気がします。

さらに、仙台でこれだけの人が聞きに来てくれて、私達の活動について知りたい、あるいは会員になりたいという人がいる。そのことだけでも私の励みになるというのも事実です。

現地で自分が働いたことの成果として、砂漠であった所が目の前で豊かな緑の田園に変わって行く光景を見る時、そしてそれを一緒に喜んでくれる日本人がいる、このことを知る事が私の励みとなって、元気の源になっていると言えるんでしょうね。
元気になる源はたくさんありますけれども、私の場合はそのことが一番大きいと思います。

ご自分の著書にサインをなさる中村先生（控室にて）



（注）

○表紙および文中で使用した現地の写真は、橋本康範氏（「ベシャワール会をみやぎから応援する会」）が3年間の現地活動の期間に撮影したものです。

○感想文集と裏表紙のカット絵は、用水路護岸の柳にちなみ、ヤナギの絵を三田あかねさん（「ベシャワール会をみやぎから応援する会」会員ご家族）に描いていただきました。

かんばつの上に、
アメリカからの
ばくだんがおちてくる、
それが何よりくるしく
かなしいことだと
思いました。

嶺村日向（小学二年生）

感想文集



ネコヤナギ

中村先生のお話を聞いて思ったこと

神奈川県 磯村 日向（小学2年生）

中村先生のお話を聞きに行こうと、おかあさんにさそわれて仙だいに行きしました。「そうだ、行こう。」と思ったのは、1ど見たかった青ばじょうが仙だいにいるからです。

でも前日ねつをだしてしまい、当日大体ねつが下がったから、とうほくしんかんせんのに、いつも中村先生の話をしているおばあちゃんと、おかあさんと、おかあさんのいもうとと、ぼくと、ぼくのいもうとの5人で大雨の中、仙だいえきにつきました。

中村先生のお話は、小学生のぼくにもわかりやすかったです。カレーズをふっかつさせ、用水ろをせんそうじょうたいの中、作ったことがすごいと思います。

先生が、たけ田信げんの話を読んだ時には、とてもおどろきました。

水がなければ、人はほとんど何もできなくなることがよくわかりました。みどりはかれ、食べものもなくなる、体をあらうこともできなくなり、のみ水もなくなる。そして、子どもが、はい水をのんで赤痢などにかかってしんでしまう。ぼくは、はじめてふだん何気なくつかっている水の大せつさがわかりました。

かんばつの上に、アメリカからのぼくだんがおちてくる、それが何よりくるしくかなしいことだと思いました。ぼくの生活は、毎日おふろに入れて、おちゃもいっぱいのもる、そんなところに、もしかんばつやせんそうがおきたらどうしたらいいのだろう。でも、アフガニスタンの子どもたちは、くらい顔ばかりしているわけではないそうです。それがとてもいんしょうにのこりました。

今、不自由のない生活をしているぼくたちができることは、あるかわかりません。でも、いろんな人のお話を聞いたり、本を読んだりしてみんなで考えます。

中村先生、ぼくたちが大人になっても元気でいてください。

中村哲さんの講演を聞いて

福島県南相馬市 島田まゆみ

思っていた以上に国の違いについて考えさせられるいいお話でした。そして、アフガニスタンという国の過去と現状がよく分かりました。

日本では、テレビや新聞での一部の情報をそのまま信じてしまいがちですが、スライドに映し出される生の映像に、あれがアフガニスタンのすべてではなかったのだと改めて気づきました。現地の爆撃の現状やテロ特措法の件にしても、やっぱり私達に情報が足りないんだと思います。

何日も歩いて診療所に来て、腕の中で冷たくなってゆく赤ちゃんの話を聞いたとき、爆撃されてアフガニスタンの多くの一般国民が死んでも、世界の国々から哀悼の言葉が届くことはない・・・という話にはとても胸が痛みました。

でも最後に中村さんが言ってくれた「お金が出せる人はお金を、それができない人はアフガニスタンのことを考えてくれるだけでもいい。みなさんが出来ること、それぞれがアフガニスタンの復興に繋がっていきます。」との言葉に、大きな勇気と希望をもらいました。

遠く離れた日本に住んではいても、もっともっとアフガニスタンのことを知りたいと思います。これからの私達に何ができるのか、真剣に考えて生きたいと思います。

中村哲さんのお話を直接お聞きできるなんて、こんないい機会に恵まれ、本当に感謝しています。ありがとうございました。

講演を聞いて

秋田市 浅野 朱美

座席に着き、ふと顔をあげると、場内に中村哲さんのアフガンでの活動VTRが流れていました。中村さんの慣れない手つきでショベルカーを運転する姿は、どこかおどけていて、しかしその笑顔にはアフガンに対する深い愛情がこもっていました。講演会が始まる前の数分間、先進国の犠牲となり荒野と成り果てた土地が再生し、緑で埋め尽くされるまでの過程を垣間見させていただきました。ビデオに吸い込まれ、私の心がアフガンの元に飛んで行った時、壇上に朴訥とした中村さんが立っていらっしやいました。

現在も首都カーブルが難民の受け入れも困難になるほど人口が膨れあがり混沌とした状況であるということを知りました。そして、その原因が先進国にあり、今なお混乱が助長しているという現実を突きつけられ心苦しく思いました。先進国の欲と傲慢さが、かつては緑の楽園だった国をこんなにも悲惨な飢えと貧困に追い込んでしまったのですね。

中村さんは、机上の空論ではなく、生きた哲学を実践されている方でした。質疑応答の時、ある女性の「私達はアフガンのために何かできるでしょうか」という質問に対して、中村さんは「お金だけ出せばそれでいい、という考えには抵抗があるかもしれませんが、私はそうは思いません。実際、ペシヤワール会を運営するにあたって年間2億円が寄付によってまかなわれております。水路を作るにしても現地の人達を雇用する形でやっていて、お金がなければこのような活動もできないのです。しかし、アフガンの人達だけが苦しいわけではないのですから、みなさんがペシヤワール会に募金をしなければならぬとも思わないのです。もし、アフガンのことを考えてくださるのであれば、アフガンのことを忘れず、思っていてくださるだけでも十分ありがたいです。」とおっしゃいました。

アフガンのことのみならず、世界の平和、調和をも願っていらっしやる中村さんの姿勢に感銘を受けました。

苦しい状況の中にも関わらず、笑顔を忘れず、愛を忘れず、戦争や武力を憎み丸腰で闘い続ける中村さんの勇姿は、会場にいらしている多くの方々の心に深く焼き付けられたものと思います。

私自身も小さなことではありますが、心に平和を保ちつつ少しでも周りに恩返しをさせていただければありがたいと思います。そんな心のあり方の基本を中村さんは思い出させて下さいました。

出会いに感謝いたしております。どうもありがとうございました。

宮城県蔵王町 中松 伴子

アフガンの旱魃の地を田に変えて
中村医師の闘い続く

（朝日歌壇入選作）

中村哲さんのお話から私の農の原点を観る

宮城県柴田町 三上幸子

「今年はさっぱり駄目だ」と夫も肩を落とす。種を播き直しても播き直しても芽がでるとすぐ虫にやられてしまう。昨年の暖冬に続いて夏の猛暑。秋は十月に入っても暑さが続き、畑の野菜を喰い荒らす虫たちがいつになく繁殖を続け、なかなか鳴りをひそめず活動していた。虫だけではない。猪や熊や鹿や猿など、ここ数年畑の野菜を狙っている動物たちは増える一方。これらの原因も人為的な影響が大きく「地球温暖化」へと結びつく。専業で農業をしている私たちにとって深刻な問題である。

そんな落ち込んだ心に活力を与えてくれたのが中村哲さんの本との出会いだった。そして今回、目の前で直接お話を聞くことで私の記憶の底から湧きあがってくるものがあり、より一層考える機会を与えられた。

とても住めないような崖っぷちに家を作り、遅しく暮らす人々。厳しい自然に向き合い威厳さえ感じる男たちの顔。瞳を輝かせ笑顔がまぶしい子供たちの顔。真の強さを持つ女たち。そして雄大な自然。私は二十代の頃ひとりでチベットからバスでヒマラヤを越えネパールに渡った。その旅の途中で見た場面、その時の思いがフラッシュバックしてきたのだ。

あの旅は私にとって今の「農」の道へとつながるものになった。都会で生まれ育った私が遠い地の田舎の風景に懐かしさを感じ、自給自足で暮らすシンプルな生き方に目覚めた。そして身体の細胞が自然に汗をかいて働きたいと動き出したのだ。私は今こうやって農の道を歩んでいることが、アフガニスタンの農民とも少しはつながっているように思ったが、実際講演で中村哲さんから真実の言葉そして現地の叫びをお聞きして自分の浅はかさに気付いた。

戦争のダメージそして未曾有の旱魃。乾ききった大地から緑が消え動物たちは死に至る。人間も又、水がなくては生きていけない。そしてその土地を離れざるを得ない。農民にとって、いや人間にとって水と大地が命なのだ。「難民」、日本ではあまり口にしない言葉が重くのしかかってきた。私たちはこんなに満たされた土地に住み平和な日常を送っているのに、何をそんなに悩み、なんでそんなに駆けずり回り、何を求めようとしているのだろうか、。。。

今年は不作だといっても我が家の食卓はちゃんと満たす事ができる。そして日本の市場は様々な食品が海を渡って入って来る。グルメやブームが食を動かしダイエットに関心が集まる。賞味期限切れ、過剰な食べ物はゴミと化す。「まずは水だ！食べ物だ！」中村哲さんがおっしゃっていた。生きていく為の根本的なことが、今の日本からはなかなか身にしみて感じる事ができない。そして私自身も農業をしながら時々「農」の基本的な意味を

見失いそうになる。

でも忘れてはいけないのが、地球温暖化の多くの原因を作っているのは日本を始めとする先進国であることだ。そしてその影響を大きく受けているのはアフガニスタンなどの開発途上国なのだ。しかもその情報はあまり知られていない。戦争にしてもいつも大きな犠牲になるのは武器をもたない住民たちだ。原子爆弾を持っている国と持っていない国。お金を持っている人と持っていない人。持っているほうが権力をもち偉いという図式の愚かさ。中村哲さんがおっしゃっていたように「王様は裸だ」と誰もがいえる世の中になる事を祈りたい。

とはいっても私自身もまた世の中に流されそうになり、まだまだはっきりとした答えが見つからずにもがいている。自分の積み重ねていることに不安を感じることもある。子供たちに今何を伝えたらいいのか日々悩んだりする。まだ二十代の頃の旅の途中のような感じさえする。

あの時の旅の話、。ヒマラヤのトレッキングの途中、小さな村の小さな一軒の民家に泊めてもらった。夜明けとともに目覚め、マチャプチャレの山を見に行こうとリュックの中のカメラを探したが見つからない。どこにもない。とてもショックだった。誰が悪いわけではない。自分の甘さを痛感した。そして山を下りることにした。

外にでると目の前にそびえ立つマチャプチャレの山の姿。朝日を浴びて輝いていた。そのとき身体全体がジーンと何かを感じた。涙が溢れた。ことばではうまく表現できないけれど、何かが存在し私たちを見ているような気がしてなぜか安心した。きっとそれは目ではなく心や身体で観えるものだと思う。それは中村哲さんをはじめとするアフガニスタン復興のために力を注いでいる人たちもきっと神聖な山々を見て感じているにちがいない。氷河は一年間で百メートル流れるという。頂に降った雪が村近くの高地まで下りてくるのは、実に五百年もかかるそう。ゆったりとした時の中で氷河は破壊と融合を繰り返し、様々な姿を見せ、そして生命へと流れ出す。中村哲さんがおっしゃっていた「氷河の流れのように」という言葉を噛み締めた。

今の私は日本で暮らしていく中で、様々な矛盾や自分の甘さそして何が大切かをしっかり見つめていきたい。そして農民として自然と向き合って生きることを意味をもういちど見直したい。汗を流す、風が突き刺す、手が赤切れる。その中でわかることがある。もがきの中で見つかることがある。心と身体で観えるものがある。中村哲さんに比べたらまだまだほんの少しの苦勞だが、そのことを大切に感じていきたいと思う。

中村哲さんの講演を聞いて

宮城県 加藤 千鶴

戦争・貧困からくる不衛生、病気。私達が生きている同じ地球上に、この苦しみから抜け出ることのできない国があります。テレビや新聞では見たり、聞いたりすることがありますが、その国の人たちのことを我が身に置き換えて、本当に深く考えたり、思いを馳せる日本人はどのくらいいるでしょうか。

その日本のテレビや新聞の報道が偏った伝え方をしているということを、中村哲さんの話を聞いて確かにそうだと思い知らされ、私がこの地球上で貧困や病気で苦しんでいる方々と同じ時間を生きる人間として、なんと浅はかな考えしかもっていないのだろうと深く深く反省させられました。

また、中村哲さんは「人間にとって何が必要で、何が必要でないものか分かった。」とおっしゃっていました。モノに溢れた今の日本の生活。大量生産、大量消費がもてはやされた時代に子供時代を過ごして来た私達は、いまだに大切なことに気づかずに大人に、親に、なっています。しかしながら、地球温暖化による環境への危機感、エネルギー問題による物価の上昇や、景気の伸び悩みによる所得の減少などの社会問題が、今の私達の重大な過ちに少しずつ気づかせてくれているように感じます。これらのことをきっかけに、もっともっと「人間にとって必要なもの、必要でないもの」について掘り下げて考えていかなければならないと痛感しました。

私達が、中村さんの活動に対しての支援は、本当にちっぽけなことしか出来ません。でも、最後に中村さんがおっしゃった言葉、ペシャワールの地で中村哲さんが現地の方々のために一生懸命活動をしていることを『思う』だけで良いと。

この言葉に、私は大変救われた感がありました。どんなに離れていても、同じ『思い』は伝わるものだということが、改めて確信できました。

きっと、今回の講演を聞いた皆さんの思いが大きなエネルギーとなって、ペシャワールの地に届くことでしょう。

講演会に参加しての感想

仙台市 山口 千鶴

このたびは大変貴重な機会を頂戴することが出来まして、有難うございました。

中村先生のお話を伺わなければ、アフガンの現実の姿を理解しないまま過ごしてしまっていたと思います。日本の今の社会にとらわれた頭でしか考えることが出来なかったと思います。「ペシャワール会」の会報等も読ませていただいておりますが、肝心なところが抜けていたようです。

ひどい旱魃で砂漠になった地面が、皆様の力で緑の土地に変わった素晴らしさには感動しました。

先生のお話を伺い、私達の日々の生活が、遠いアフガンの人々の生活とつながっているように感じました。地球環境がこれ以上悪くならないよう、まずは自分で出来ることをやり続けたいと思います。

私のカンパも、あの蘇った緑の草の中の本になっているかもしれないと思いますとうれしくなります。

数日前もカーブルでの爆撃の報道があり、何十人もの方々が亡くなられたと伝えられました。こんなことが一刻でも早くお終いになり、飢えの中で生きなければならない人々に普通の生活が戻りますよう、諦めることなく祈り続けたいと思います。

折角、質問の時間がありましたのに、その場では思い浮かびませんでしたが、飲料水はどうしておられるのだろうかとか、旱魃の時など日本の雨乞いのような儀式なんかあるのだろうか等、つまらない疑問も湧いてまいります。

「ペシャワール会」の会報をこれからもじっくり読ませていただき、皆様のご活躍を応援させていただきたいと思います。

講演会に参加させていただきまして、心から厚く御礼申し上げます。

それぞれのヒンドークッシュ山脈

宮城県丸森町

椎名千恵子

物事の根元のところが見えてくるお話をいただきました。

特に「金はなくても食っていけるけれど（ヒンドークッシュ山脈の）雪がなかったら食っていけない」というアフガニスタンのことわざ。

以前、稲作をしていた時のことを思い出しました。

早春の肌寒い中、水を引くためのクロ（畔）を張っていた時のこと。

（ ※平地の中で小高い所、田畑の畔 ）

粘りの効いた土の重さが辛く、腰を伸ばし伸ばしの作業の途中、フト気付いたのです。

「あつ、ここ（田んぼ）に流れるその源は、あの遙か向こうの森にあったんだ。」

それまで、10年近くドングリを育てて、山にかえす森づくりをしていただけに、

そこで考えが止まってしまっていて、

もっと手前のところまで問題をかえしていなかった、

こころの引きが甘かったことに気づいたのです。

森のひとしずくが沢の源になり、

流れ来た水をいただいての稲作。

そして我がいのちを支える、

まさに“いのちの線”が見えた思いをしたのです。

“原油、電気等”を称してライフラインと名付け呼ぶことに違和感を覚えるようになったのはその時からでした。

投機経済の都合で上げ下げされて、

そこにしか私たちが生ききって行く道がないような錯覚は

御免こうむりたいとつくづく思ったのです。

折しも原油値上げに日々の不安を駆り立てられる昨今、

私たちのいのちを真の意味で、

実のところ支えてくれる「ライフライン」は何なのか、

改めて熟慮するにいい機会をいただいたと思いました。

それぞれの「ヒンドークッシュ山脈」を、

この際知ってみようとする、

そこに思いを馳せる、

そんなきっかけにしてしまうのもいいかもしれません。



ヤナギ

中村先生へ

宮城県柴田町 太田 正孝

中村先生の講演、感謝しております。アフガンの現状は、日本では計り知れない出来事のようにです。

平和で愛に満ちた喜びの人生、次代を担う子どもたちを育み紡いでいく静かで尊い日々、そのどれもが失われる世界となっていますね。今、権力と政治がもたらす負の贈り物がアフガンにはある。中村先生はそのいずれにも左右されることなく、アフガンの子どもたち、弱い人々に、あたたかく命を紡いでいくプレゼントをしています。

人の都合のための主義・主張から生じる憎悪の連鎖に翻弄されることなく、大切に生と死に感謝と希望をあたため、非暴力そして信愛の力を信じて紡いでいくのだと思います。

先生の地球の同胞（はらから）への思いの極みを、行動を、私は支持しています。

先生の愛を感謝しております。

アフガンの地で等しくある恵みの太陽と癒しの月に浴されない人々に、失意と絶望の淵から夢と希望と力の泉が湧き出ますよう、お祈りいたします。

中村先生、私は先生を心から敬愛し支持しております。健康に留意され、ご活躍されますことをお祈りいたします。私も少しばかりの支援でも、出来る所から始めたいと思っております。

私達に出来ること

福島県 島田 俊之

依然として紛争が続く混乱したアフガニスタンにおいて、今回の中村先生の講演を伺い、どのような事をやっておられたかはテレビや本で知っていたつもりでしたが、本当に大変な事をなされていて考えさせられました。

先生が初めてアフガニスタンに入られた時以来、その後この土地と共に人生をかけられたこと、関わりあってきた人々との事など、とても私達の真似できる事ではないと感動いたしました。

現状のアフガニスタンは、すべてのシステムが崩壊して、何処から手を差し伸べて良いのか分からない状態だと思います。そうした中でも、先生が行った衛生的な水の確保も、現地の人々には絶対必要であり、第1の条件だと分かりました。そして、水による農業支援まで発展し、食による健康な体になれば病院にかかる人も少なくなり、先生が行ってきた事が全てに通じることだと思いました。医師でありながら土木まで学び、現地の人を使つての作業は想像を絶することだと思っています。

世界を震撼させた2001年9月11日の世界同時テロ事件から6年が過ぎ、依然として各地で紛争と混乱、破壊が止みません。被害を受けるのはいつも一般市民で、とても心が痛みました。都合の悪い事は報道規制をしき、私達の目の届かないようにしているのも気になります。私も出来るだけ多くの人に現状を知らせ、何かしらの支援を続けたいと思っています。

私もアフガニスタンとの関わりを持つこととなったのは、東京在住の姉が会社勤務の傍ら国際NGOのお手伝いをしていて、平成18年8月現地アフガニスタンに直接赴き、その時の現状を見てきました。その体験談を聞かされ、改めて国際貢献の理解の一部でもお手伝い出来ないかと考えさせられました。

今まで私達がテレビで見聞きした話は、アフガニスタン＝テロという図式ですが、生活している人々は普通の市民であり、多大な犠牲を強いられているそうです。

私はロータリークラブに在籍している関係上、9月にクラブ主宰のアフガニスタン復興支援講演会を開催し、11月には農業支援で福島県旧原町市にナンガハール州より2名を招いて農業指導を行い、帰国の際には原町ロータリークラブメンバーから、子供らの為にノートや鉛筆を渡しました。

今回の講演会で、一人でも多くの方に、「多少の力でも私達に何か出来るのではないか」という気持ちが生えることを願っています。

見えない不安をよく見れば

仙台市 多々良 史弥

「平和を願っている」と口に出す事に、なぜこんなに抵抗しているのだと思うことが時々ある。今や、戦争反対のスローガンはダサイのかな。いやいや、そんな事はないはずだ。百歩譲ってダサイとしたって、そんなの結構じゃないか。べつにかっこよくなる為に、戦争に反対するわけじゃないんだし。

中村哲さんは講演会で、「過酷な状況にあるアフガニスタン人よりも、日本から来たスタッフの方が暗いと感じる時がある」というような事を話していた。たしか「日本の暗い若者」という言葉で、表していたと思う。そうそう、そうそう、僕は日本の暗い若者だ。だって戦争反対！とも言えないのだから。

よりによって僕が16歳の誕生日を祝った次の日、2001年9月11日に同時多発テロがあった。そうして数年たった今、ようやくあの事件の事をずっしりと重く感じている。

あの事件から始まった幾つかの戦争が、僕の時代の戦争だという気がしているのである。

つまり、アフガニスタン侵攻やイラク戦争に反対すべきは僕（僕ら）だったのかなと思い始めたのだ。そう思うと、急に居ても立ってもいられなくなる。とりあえず、本を読んだりネットで調べたりしてみた。アフガニスタンの侵攻や大旱魃、イラク戦争、ミャンマーでは反軍政デモ、新テロ特措法、憲法第9条、沖縄の集団自決をめぐる問題、六ヶ所村の再処理工場、などなど。今までは無かった新たな視点で世の中を眺めてみると世界各国、日本も北から南まで、問題だらけ。あ〜どうしよう…。

そんなこんなで、悲しい出来事ばかりが目に残まるようになり、絶望感、無力感、その果ては日本の暗い若者だ（笑）

はたして、自分はそれに対して無力か。

そうでもない気付くには少し時間がかかるかもしれない。

憲法第9条がこれから先ずっとずっと必要だと。そう思えば、必死に誰かに伝えてみればいい。アフガニスタンの現状にショックを受け危機感を感じたならば、支援の方法を探ってみるべきだし、ペシヤワール会の活動方針に賛同するならば会員になって資金援助してみるのもいい。それでもまだ足りない！と思えばもっとたくさんの人にアフガンの現状を伝える方法を探ってもいいかも知れない。

六ヶ所村になにやら大変危険な施設ができたと聞けば、ネットで調べて大まかな事は掴めるはずだ。友達、同僚や先輩に反対署名をお願いすればそれなりに溜まるかもしれない。

僕は、戦争や平和や宗教や、その他もろもろの、簡単には答えが出ない問題にぶち当たり、身動きが取れなくなっていた事もあったと思う。だから今でも声を大にして何かを主張する事が怖い。一つの考え方には、必ず反対意見もあるから。でも、答えが出るまで待ってたら日が暮れるどころじゃすまない。

先に書いたような絶望感や無力感を察知してか無意識的に問題を避けている人は、少なからずいるように思う。その人たちに伝えたいと思うのなら、自分が下を向いていちやダメだ。

中村哲さんからひとつ大きなヒントを教わった。

「しちやいけないことを考える」という事だ。

むずかしい理屈じゃない。しちやいけないことを考えるだけだ。

なるほど、さすがベテランは言う事違うなあと思ったし、シンプルなメッセージの中に凄く力強さを感じた。少し目の前が開けたような気がした。

そう、ゆっくり学んでいくしかない。

きっと日本の暗い若者だって、タフになれる道はある。

中村哲講演会に参加して

宮城県富谷町 藤原 弓子

「ペシャワール会」の中村先生の講演会が聴講できる、テレビではなく自分の目で見て、聞くことができるなんて!!アフガニスタンで医師として、診療所設立、灌漑設備の工事の指揮をとるなど、あれだけの活動をされる中村先生はいったいどんな話をしてくださるのだろう。

講演会を聴講できることを私は首を長く、楽しみにして待っていました。

今回スタッフとして参加した私は講演会前から、中村先生のアクティブさに驚かされてしまいました。

講演会当日、長旅（アフガニスタンと日本との往復よりは近いかもしれませんが…。）で、仙台空港から直接会場入りしたにもかかわらず、「時間がもったいない。本にサインをしたい。」とのお考えで、休む暇もなく著書へのサインを書かれます。その数会場に準備した著書全て。私のこの驚きは、だんだんと感動へと変わっていきました。

講演での言葉ひとつひとつが素朴でしたが、内容がずしりと重い。

「しちやいけないことをしない。」「現地の人よりも日本人ボランティアの方が暗い顔をしている。」など。

「しちやいけないことをしない。」は、頭の中では理解しているつもりでも、自分は本当に理解しているだろうか、自分でも自信がありません。

テレビをつければ日本内外の惨事や出来事が目に入る。ああ、またやってはいけないことが行われている。と思いつつも、スイッチを切るとその思いもどこかで切れて、他人事のようになってしまっているような感じにかられます。

同じ地球で起こっていることなのに、テレビのスイッチのように、理解したつもりでいたり、いなかったりころころ変わる。あまりにも多くの情報がまわりにあふれすぎ、大切な情報を逃しているのではないのでしょうか。それとも、マスコミによって作られた情報に、私達は振り回されているのでしょうか。どちらにせよ、中村先生がおっしゃる日本人ボランティアの暗い顔は、今の日本社会の暗さそのものを反映しているように思えてなりません。

では、私たちに何か出来るのだろうか。実際にアフガニスタンに行くことはできないが、日本で出来ることはないのだろうか。この問いに中村先生は「アフガニスタンのことを考えるだけでいい。」この言葉もまた胸に響きました。アフガニスタンの事を考え、募金をしたいと思ったら、行動に移す。会員になりたかったら、申し込む。

これらの元は、アフガニスタンを考えて日本にいる限りできる行動。たくさんある情報の中から、自分で情報を取捨選択する。多々ある情報から、ある特定の情報を探す、考える。これも先生がおっしゃる、地域交流の第一歩なのかもしれません。

私は現地で活動経験のある中村先生はじめ橋本さんにも話を聞く機会がありました。お二人の話に共通するのが、アフガニスタンの人から、私たちに欠けているもの学ぶものがあるのだということ。それは現地の子供達の輝いた笑顔であったり、労働を通して自然と身につく道徳教育や家族づきあい。現代の日本に欠けている事だと思えてなりません。

この講演で私は、中村医師の活動に本当に頭が下がる思いがし、人間味あふれる中村医師の人柄に何かこみ上げてくる思いがありました。

ペシャワール会中村先生の講演会を聴講でき、大変貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

どこかで春が生まれてる

宮城県蔵王町

我妻正美

講演会では、中村哲さんの現地の映像を用いたお話を聞きながら、私は子供の頃に見た河川工事や耕地整理などの光景を思い浮かべ、様々な事を次々と考えていた。中村哲さんのお話は、いずれも現場の当事者にしか語れない事実や思いであり、更には中村哲さんの無骨な風貌も相まって、人間の魂の声を聞いた思いがした。

さて、講演会からしばらくたったある日、テープ起こしの担当者から問い合わせがあった。「護岸工事の工法のところで、リュウシコウというのがでてくるけれど、どういう字でしょう？」とのこと。日本の伝統的な土木技術用語らしい。そんなわけで、日本古来からの治山、治水、利水の思想や技術への興味と好奇心もあり、関連書を何冊かのぞいてみた。すると、近所のあの河もこの堤防も用水路も、実は特定の思想と技術によって造られていることがわかり、“目からウロコ”だった。

明治時代、北海道石狩川治水の祖といわれた岡崎文吉。彼の治水哲学は「自然主義」とよばれ、それは次のようなものであった。「自然が大部分に対し、理想的に成就してきた河川の現状を維持し、たまたま存在する不良な一部分に対してのみ、自然の実例に鑑みて、これを改修する主義を、わたしは自然主義と名付ける。…、自然を保護し、またこれに準拠するの外、自然に背反する事業は、決してこれを施行しないことである」これは、近年関心が高まっているビオトプの考え方（生物が生きられる環境を再現しようというもの）にも通じ、中村さんたちが現場の必要性に迫られて採用した工法とも共通するものがあると思った。

人類は、永らく殺戮や経済発展を積み重ね、「超資本主義」とか「信用資本主義」とかいわれる社会経済時代に突入したといわれている。今、世界的にも恵まれたわが日本の山や耕土は、戦乱も起こっていないのに“大旱魃”に見舞われ、離農と耕作放棄が進行している。アフガニスタンとは全く事情は異なるがどこか共通するなにかを感じてしまう。

こうした状況の中で、わたしたち一般民衆は、今後ますます生活苦などの寒冷化現象に苦しむことになるだろう。しかし悲観することはないと思う。「諸行無常の響きあり」こそ大自然の摂理であり、歴史の常。どこかで春が生まれている、そんな気がする。すでに国境を越えて、いたるところで春が生まれているにちがいない。それは、金子みすずの詩「冬のタンポポ、見えないけれどあるんだよ」のように、あるいは、氷河の流れのように、今は見えないだけなのかもしれない。そんな春への予感を、中村哲さんに感じた講演会だった。

付記 リュウシコウは「柳枝工」であることが蔵王町立図書館の検索サービスコーナーで判明。九州の国交省の資料から見つかった。

中村哲医師のお話を聞いて考えたこと

酒井 伸 (塩釜市)

10月26日仙台市で、1984年以来アフガニスタンで活動が続けているペシャワール会の中村哲医師のお話を聞き、アフガニスタンの現実を身近に感じることができた。アフガニスタンは日本の1.7倍の面積を持つ「山の国」であり、雪や氷河の恩恵を受ける農業国家である。人口2400万人のほとんどがイスラム教徒であり、8割以上は農民である。早ばつと戦争の中で半数の人々が飢餓線上にある。多くの子供たちが清潔な水がなく、泥水を飲んで疫病にかかり、ほんのわずかな医療さえ受けられずに日々死んでいく。

アフガンは他の多くのイスラムの国と同様イスラム法が律する部族の共同体である。すぐ「国」を思い浮かべ、国は何もしないのかと考える私たちの常識は通用しない。教育も道路も大事だが、まず生きなければならず、水とパンが必要なのである。早ばつで荒れ果てた土地に水を引き、緑の耕地にすることが中村医師たちの喫緊の課題である。そのためにも、まず、外国軍がアフガンから撤退しなければならない。どんな山奥でも、アフガンの人々は日本を「ヒロシマ」「ナガサキ」で惨害を受けた国、それでも平和を追求しつつ経済復興を成し遂げ国だとして敬意を抱いてきた。しかし、2001年以降、その平和の国のイメージが徐々にこわれようとしている。このまま自衛隊が米軍を支援し続け、さらに万一、アフガン国際治安支援部隊（ISAF）に参加するようなことになれば、NGOがアフガンに留まることすらできなくなる。今、中村医師たちはぎりぎりのところに立って医療事業と飲み水やかんがい用水の水源確保事業を続けている。これらのことがひしひしと伝わってきた。

*

2001年9月11日の対米同時テロ発生直後、米国の政権首脳は、このテロを行ったのは国際テロ組織・アルカイダであり、アルカイダとこれをかくまっているタリバン政権とは一体であるとしてアフガン戦争の意思決定を行った。

2001年10月7日から行われた米軍の「不朽の自由作戦（OEF）」開始によるアフガン空爆は、アルカイダとタリバンだけでなく、テロには無縁の多くの女性や子ども、お年寄りを含む一般市民をも殺傷している。米国は自衛権を掲げて報復戦争を行い、同盟国は集団的自衛権を行使してそれを支援した。しかし、報復戦争は、自爆テロの急増など治安の悪化をもたらしている。テロ根絶のためには、国際的な警察の力によって犯人を捕らえて被害国に引き渡し犯罪として裁くことが重要であり、他方、テロの土壌である貧困や教育の解決に力を注ぐ必要がある。イスラムをテロに結びつける偏見にも注意したい。イスラム教徒は全世界におよそ12～13億人いるといわれる。その教義は「宗教社会内

部における異教徒集団に対する大幅な寛容、他の宗教社会に属するものに迫害を加えることを自ら拒否する態度、さらに衰退の時期に自ら耐える自尊の態度を形成したことを、みのがすことはできない。」（「イスラム入門」ハミルトン・A・R・ギブ）とされる。イスラム文明は、9.10世紀に工芸、商業、建築、各種芸術がいつせいに開花し頂点に達した。現代社会においても、イスラムを異文化として理解する努力が大切である。

*

日本では、2001年10月29日にテロ特措法が成立し、11月9日には海上自衛隊の艦船3隻がインド洋に向けて出航した後方支援すなわち他国の兵站を担うことは、武力による威嚇または武力の行使にあたるというのが、国際司法裁判所の判決など国際法の常識である。国際法から見れば、自衛隊が米軍の対テロ報復攻撃「不朽の自由作戦」（OEF）を給油、給水などで支援することは、集団的自衛権の行使そのものであり、日本国憲法上許されるはずがない。

現代戦の特色は、補給および輸送の必要が膨大なことであり、補給量の60%以上は燃料であるとされる。給油なくして艦船は機能しない。海上自衛隊の補給艦が米強襲揚陸艦に補給し、この揚陸艦のハリアー垂直離着陸攻撃機がアフガンに攻撃飛行したことは、国会議事録の石破防衛相答弁でわかる。日本がアフガン空爆を支援したことになるのは明らかではないか。2001年12月5日、ハミド・カルザイを議長とする暫定行政機構を設置する協定が成立、12月7日タリバン政権崩壊、12月20日には安保理がアフガン国際治安支援部隊（ISAF）設立を決議した。（決議1386）

このように、安保理決議の授權を得た多国籍軍の目的・任務が武力行使を伴うものであれば、これに参加することは、憲法上許されないというのが政府見解である。また、国連憲章は加盟国の憲法を尊重する立場を明確にしている。（ただし、政府は「協力」については、武力行使と一体になるものでなければ、憲法上許されるとしている。）

日本がインド洋で後方支援を行うことは、実態としてはOEFの兵站を担うことである。また、ISAFに協力・参加することは、米国が主導する北大西洋条約機構（NATO）が指揮する武力行使に加わることである。いずれも日本国憲法上許されないことは、明白ではないだろうか。

私たちは、軍事的「国際貢献」をしないから日本が国際的な義務を果たしていないのかのように考える落とし穴に陥ってはならない。日本の平和憲法の理念こそ、国際社会の課題を解決する上で道標になる。GPPAC（軍事紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ）によって開かれたグローバル会議においても、アジア太平洋諸国の市民運動によって日本国憲法九条は、地域の紛争予防と信頼醸成の基本原則として模範とされるべきことが決議された。武者小路公秀教授が言うように「国連の平和維持活動という警察行動をも『平和強制』として軍事化してしまう実態状況」の中で「日本国憲法の平和主義は、いまこそグローバル規模で実施されるべき歴史的な段階にはいつているのである」

(付)

最近、国連の平和活動に参加することは国家の主権である自衛権を超えたものであるとして、それが武力行使を含むものであっても、日本国憲法に抵触しないという憲法解釈が議論になっている。この考え方は、今後、学問的にも批判されると思われるが、目下、一市民として理解していることは、次のとおりである。

① 立命館大学・大久保史郎教授は、「自衛隊や日米安保の役割を国際的次元で拡大しようとする動き」として、かつての自民党小沢委員会の提言（1992年）をあげ、「国際関係を国家間の権力政治ととらえ、『国際平和の実現』をもつばら軍事力によって達成する立場が基調になっている」とする。自民党小沢委員会の提言は、現在、姿を多少変えて現れていると思われる。

大久保教授は、憲法「前文は国際関係を『諸国民』の関係としてとらえるのであり、主権国家は所与のものとしてあるのではない。『平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持』するのであり、とりわけ、『平和のうちに生存する権利』の確認をふまえた上での主権国家であった。」小沢委員会の「見解は、日本国憲法が軍事力を基本にした国際関係・国家間関係観からの脱却、否認をはかっていることを見失っていた。」と批判している。また、大久保教授は憲法前文が「『全世界の国民がひとしく平和のうちに生存する権利を有する』と表現したことは、戦争をとらえる視点を国家の側から国民の側に180度転換させるものであった。平和と人権を直接的に関係付ける規定として、憲法・政治思想史上の画期をなすのである。」「戦争や武力行使を個人の視点から見れば、いかなる戦争にも『正義』はない。」と喝破している。

② 現実には即して考えれば、国連決議により授權された多国籍軍といってもISAFの指揮をとるのはNATOである。自衛隊を国家の意思で多国籍軍に派遣し、NATOの指揮下に置いてしまえば、憲法違反は回避できるという解釈は、憲法上の制約を負っている日本として無責任だといえるだろう。

③ 日本国憲法の成立過程、憲法前文および第九条を考えれば、治安確保という理由でテロと無関係のアフガン市民をも殺傷しているISAFへの参加を日本国憲法に抵触しないという立場は、平和を愛する市民が認めるはずはなく、必ず克服されるであろう。

あ と が き

雨降りの金曜日夕方、道路が渋滞しているという悪条件で、なかなか客席が埋まらない……。やきもきする中で開演した中村哲講演会でしたが、終わってみれば会場はほぼ満席でした。中村先生の静かな語り口の中に込められた強い意思と願いは、会場にいる一人一人の胸にずっしりと響きました。自分ができることは一体何かという重い問いをそれぞれが持ち帰り、今も考え続けていると思います。

講演会で問いかけられたことを多くの人に伝えたいという思いが、この報告集の発行につながりました。

過密スケジュールをやり繰りして仙台までお越しくださった中村先生、そして雨の中、会場へお越しくださった方々、さらに感想をお寄せ下さった方々に心から感謝申し上げます。また、講演会のきっかけを作ってくださった「にゃむにゃむ企画」の沓澤小波様や、広報活動・講演会の運営等で全面的に支えてくれた「ペシャワール会をみやぎから応援する会」会員、当日駆けつけて手伝ってくださったボランティアの皆様にも厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、講演会の開催にあたり、助成して下さった仙台国際交流協会様、未来の東北博覧会記念国際交流基金様、後援して下さった宮城県国際交流協会様、JICA東北様に、心からの謝意を表したいと思います。

中村哲先生の想いと、多くの方々のご厚意にお応えするためにも、宮城の地で「ペシャワール会」を支援する歩みを今後も地道に続けてゆきたいと思います。

【 問い合わせ先 】

「ペシャワール会」事務局

・住 所 〒810 0041 福岡市中央区大名1 10 25 上村第2ビル 603 号
・電 話 092-731-2372 Fax 092-731-2373
・Email peshawar@kkh.biglobe.ne.jp
・ホームページ <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

「ペシャワール会をみやぎから応援する会」事務局

・住 所 〒983 0845 仙台市宮城野区清水沼2-11-26
・電話&Fax 022-256-9055(佐藤) ・携帯 070-6954-2366(佐藤)
・Email sstomoko@nifty.com
・ホームページ <http://peshawarmiyagi.seesaa.net/>

「ペシャワール会」は会員の会費・寄付を中心にした寄金によって運営されている NGO(民間海外協力団体)です。会の活動をご理解くださる方はどなたでも入会いただけます。

年会費

・学生会員	1,000円より
・一般会員	3,000円より
・維持会員	10,000円より
・団体会員	30,000円より

※会費以外の寄付は随時受付けております。

年会費・ご寄付の送金方法

郵便払込口座 01790-7-6559
加入者名 ペシャワール会

※ご入会の際は通信欄に「入会」と明記してください。

発行・編集責任: 中村哲講演会実行委員会
印刷・製本協力: 萩の郷福祉工場印刷部

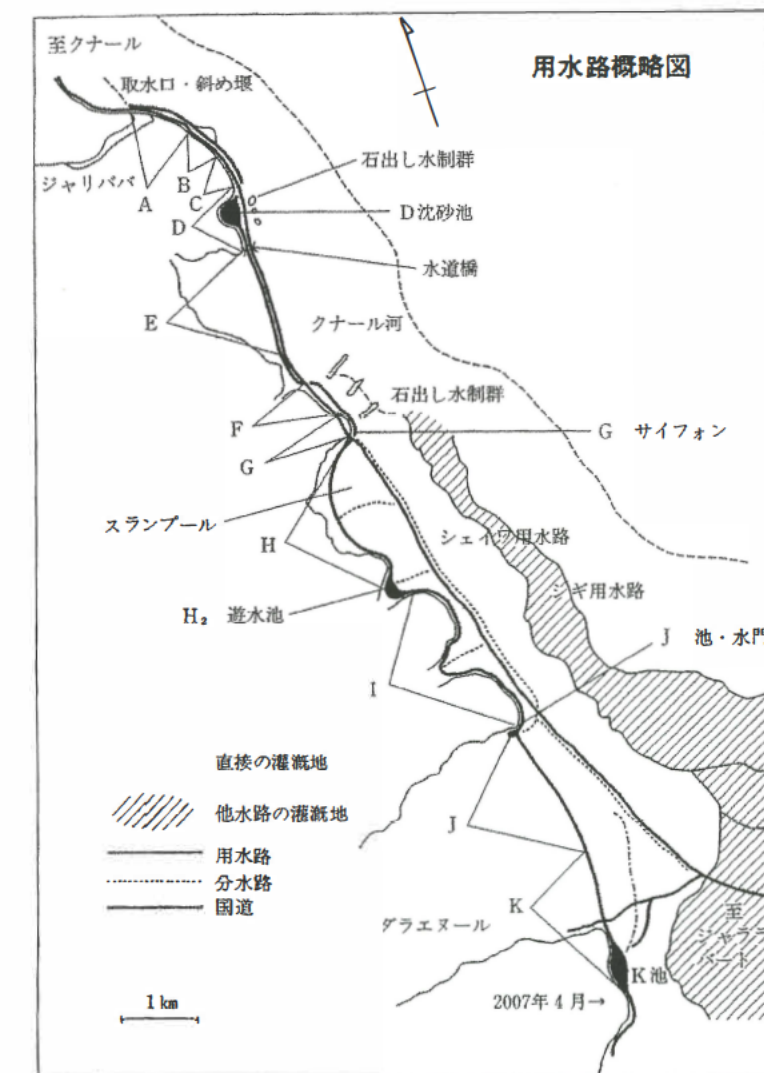
中村 哲 (なかむら てつ)

【略歴】

ペシャワール会現地代表
PMS (ペシャワール会医療サービス) 総院長
1946年 福岡市生まれ。
1973年 九州大学医学部卒。
専門=神経内科 (現地では内科・外科もこなす)。国内の診療所勤務。
1984年 パキスタン北西辺境州の州都のペシャワールに赴任。
ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携わる。
2000年 飲料水確保のため、井戸掘削開始。
2002年 「農村の回復なくして、アフガニスタンの再生なし。」
の確信のもとに、現地に適した作付けの研究農場、灌漑
用水路建設を始める。
2007年 3月 用水路13キロ完成。送水できる耕作面積7,500町歩。

【著書】

『ペシャワールにて』『医は国境を越えて』『医者井戸を掘る』(石風社)
『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房)
『ほんとうのアフガニスタン』(光文社) など



我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、
騒々しく現れては地表に消える小川を尻目に、確実に困難を打ち砕き
かつ何かを築いてゆく者でありたいと心底願っている。

中村哲「ペシャワールにて」(増補版あとがきより)



発行：中村哲講演会実行委員会